

ナツノハズレデ

強く美しい
まっただき夏よ

あこがれは遠く
ぼくらが歩くのは
いつも
思いもよらなかった
昏い森

声無きいのちの
ふるえる森の
蝉たちの足下には
抜け殻と亡骸
土のなかにみどりご嬰児

記憶と予感の
汽水域で
ぼくらは知る

低き地に
太陽のかけらが揺れて
影が
虹を抱く
閨ねやに変わる

正しさからこぼれ落ちた
いのちの
ほんとうが
息づく
ところ

松浦のり子